





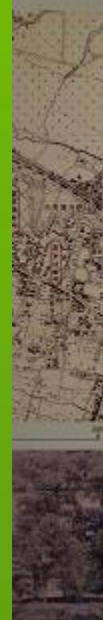
明治二十六年四月 農商務省
 農事試験場がこの地東京府北豊
 島郡瀧ノ川村西ヶ原に創設され
 我が国の農業技術研究は発祥
 した
 爾来八十七年 その間 昭和
 二十五年四月 農業技術研究所
 と改称される等組織機構の変遷
 はあつたが 西ヶ原は常に近代
 農学を先導し 我が国における
 農業関係試験研究機関の母体と
 して 多くの輝かしい業績によ
 り農業の発展に寄与してきた
 昭和五十五年一月 国立試験
 研究機関の筑波研究学園都市へ
 の移転に伴い この地での研究
 を終わる
 西ヶ原の栄光の不滅を祈念し
 ここに記念碑を刻む





初代 農事試験場長 東京蚕業講習所長 沢野 淳

沢野淳は安政6年(1859)兵庫郡三田藩の家老の長男として生まれる。駒場農学校で農学・農芸化学を学び、明治16年(1883)に駒場農学校を卒業。その後は大学に残り明治18年(1885)に助教授となる。明治22年(1889)官命をおびてドイツに派遣されるが、その後アメリカ・フランス・インド・セイロンを巡回し、農業技術をつぶさに視察する。帰国後、沢野は欧米の技術移植だけに止まらない日本の風土に適した農業技術を確立するため、農事試験場の設立を時の農商務大臣陸奥宗光に促し、明治26年(1893)には初代農事試験場長に就任する。明治31年(1898)には初代東京蚕業講習所長にも就任し日本初の農学博士となる。明治36年(1903)第5回内閣勅諭博覧会審査員として大阪に出張中倒れ、そのまま帰らぬ人となる。



プロローグ より良い生糸を求めて

幕末から明治にかけてわが国の代表的な輸出品は生糸と絹であった。特に新橋(海)は養蠶子産流行のため輸出に有利な環境であった。その一方で蚕糸産業も悩ましい問題で、明治政府は絹糸産業として明治5年(1872)に官営製糸場(初代局長の兄高田清忠は徳川幕府の義兄)を建て、且から最新鋭の製糸機を導入するとともに技術者育成と良質な生糸生産技術の獲得に努めた。さらに明治18年(1885)には高田から横浜まで鉄道も整備した。明治30年(1897)横浜港における輸出品目では生糸は60%を占め、輸・産額を合わせると既に71.6%にも上っていた。明治年間を通じてこの傾向は続き、明治40年(1907)には半面をおさえて数第一の生糸輸出国に上りつめの国力を支える原動力の一つとなった。こうした時代背景の中、国産生糸として少しでも優良な産物と名声を積み出すため、国は絹糸業に必要とされる技術者の養成を図る実業教育機関の設置と運営に取り込んだのである。



東京蚕業講習所(現・東京蚕業試験場)の建物



原蚕種製造所の独立

当時多品種を飼育している日本と比べて欧州の品種は概ね同一であり生糸の品位が保たれているとの認識から「蚕種統一」という議論が起こり、原蚕種配布を主とする政府機関が望まれるようになった。明治44年(1911)5月勅令により原蚕種製造所(初代所長:加賀山辰四郎)が生れ、豊多摩郡杉並村大字高円寺に本所が置かれた。これによって西ヶ原の東京蚕業講習所で行われてきた様々な試験研究は全て原蚕種製造所に委ねられ、夏秋蚕部も翌年同所に移管され松本支所になり、綾部・前橋・一宮・熊本に支所が置かれた。大正3年(1914)6月には名称を蚕業試験場に戻し、国内に6支場をもつ機関に衣替えした。これ以降、蚕業試験場は西ヶ原の東京蚕業講習所とは別の道を歩みだすことになった。蚕業試験場はその後拡充を続け昭和12年(1937)1月に蚕糸試験場と改まり、昭和63年(1988)10月に廃止されるまで長きにわたり高円寺の地に存続した。

標本で語る蚕蛾と生糸

蚕蛾は人類が何世紀もかけて産業用に開発した家畜的な昆虫です。それは翅があるにもかかわらず空中に飛翔できない成虫と、餌を自ら採集できない幼虫の生態に象徴されます。このコーナーは企画展開催にともない、4月25日(日)に開催する映画会&トーク「映像で80年前と現在の蚕業をふりかえる」に参加される方々向けに、養蚕の基本である家蚕の昆虫学的生活史と関連の生糸について標本を使用して展示するものです。しかし、一般の展示観覧者の皆様方にも十分に参考にしていただける内容ですので、どうぞご覧ください。なお、展示に使用した標本は概ね独立行政法人農業生物資源研究所が制作し所蔵しているもので、このたび企画展を開催するにあたり特別にお借りしたものです。

表 札

農業生物資源研究所蔵

農商務省原蚕種製造所綾部支所の玄関に掛けていたと思われる。明治44年(1911)5月に東京蚕業講習所から試験研究部門が杉並の高円寺に本所をもつ原蚕種製造所に分離された。当初綾部(京都府)・前橋・福島に支所が置かれ、翌年4月には夏秋蚕部が松本支所になり、大正2年(1913)4月に新たに一宮と熊本に支所が置かれた。





標本で語る蚕蛾と生糸

蚕蛾は人類が何世紀もかけて産業用に開発した家畜的な昆虫です。それは翅があるにもかかわらず空中に飛翔できない成虫と、餌を自ら採集できない幼虫の生態に象徴されます。このコーナーは企画展開催にともない、4月25日(日)に開催する映画会&トーク「映像で80年前と現在の蚕業をふりかえる」に参加される方々向けに、養蚕の基本である家蚕の昆虫学的生活史と関連の生糸について標本を使用して展示するものです。しかし、一般の展示観覧者の皆様方にも十分に参考にしていただける内容ですので、どうぞご覧ください。なお、展示に使用した標本は概ね独立行政法人農業生物資源研究所が制作し所蔵しているもので、このたび企画展を開催するにあたり特別にお借りしたものです。









謝 辞

本展の開催にあたりましては、下記の皆様方には一方ならぬお世話をいただきました。

ここにご芳名を記し深く感謝申し上げます(順不同、敬称略)。

機関関係者

国立大学法人東京農工大学科学博物館

朝倉哲郎 中澤靖元 沖 愛子

国立大学法人東京農工大学工学府史料編纂小委員会

佐々木清文 高島 貢 澤田孚夫 壁矢久良

独立行政法人農業生物資源研究所

小林栄一 野崎 稔(当時) 於保正弘 井上建紀

独立行政法人農業・食品産業技術総合研究機構

食と農の科学館

小林優一(当時) 荒井由美子

財団法人大日本蚕糸会 蚕糸・絹業提携支援センター

安藤俊幸 佐藤良介

財団法人東京市政調査会 市政専門図書館

平田幸子 山野辺香葉

東京都公文書館

本城由紀子 大石克也

北区立中央図書館

黒川徳男

個人関係者

本多 力 戸倉陽子 梶原利夫 加藤一夫 櫻井眞樹